

ます。

思い起こせば昭和47年(1972年)水晶事業の発展を目指して戦後の東洋通信機としては初めての地方生産拠点として、福島保原工場が設立されました。工場の移転としては川崎から相模へはあったものの京浜地区から遠く離れた東北の福島への移転とあって、社員本人のみならず家族の生活拠点の移動を伴うものであり、それに加えて子会社として福島東洋通信機の経営方針が流動的であったこともあり社員に対する説明が不十分であったので、将来に対する社員の不安は大きく機種移転の度に移転反対の声が根深く起こり労働組合との折衝は困難を極めました。そのため受注、生産等の計画の変更が度々で事業拡大が阻害されたことを記憶しております。

それだけに保原、小高工場設立時に率先して現地に家族共生活拠点を移し生産移管に献身的に働かれた社員の方々には今でも心から敬意を表します。

しております。

今後福東OB会としては、会員の皆様が健康に留意され余生を楽しく集う会になられるよう切に念願する次第です。

福島のスタートは3人だった

原 幹夫

福東OB会15周年は福東45周年と重なる。今年6月富山大学で宝石学会があり、人工水晶が話題となった。帰ってから開発当時の流れ(歴史)を整理したところ楽しい人々との出会いを思い出し、それを書いてみました。『石づくり50年』として数年前にまとめたものを中心にポイントをひろい上げてみた。内容はオートクレーブの開発



出向者家族の芋煮会

が中心で固いので歴史の後半、福島スタート辺りを簡単にまとめてみました。

人工水晶工業化は川崎でスタート、相模でシステム化完成したものを福島で専用工場として花開いたものである。

中心は3人の技術者が福島での現地の高卒新人15人と共に最新鋭のシステムの動かすが、全員経験の無い人たちであった。新システム作業には国家資格が必要なものが多くあり、一人以外は資格零から始めたものである。

初代工場長の石坂さんがいろいろ苦労して何とかまとめてくれた。新人の中には作業が厳しいので逃げ出した人もいたが、ふとんをかぶって泣いている少年をくどいてつれだし、なんとか仲間として作業を続け、一年たらずでもうかる工場にしたのは、現場リーダーの矢崎君だった。彼は少し不器用なところがあるが、すごいがんばり屋でいつも作業者の中心にいた。楽しい職場にするため親ばくの輪をひろめ

た。親睦の場として、花見、旅行、盆おどり、運動会、いも煮会、スキー等毎年行なった。学校を出て、何も解らない新人たちをやる気人間にしてくれた人であった。大卒新人として人工水晶部に配属され新システムプロジェクトチームに入り、一年後福島へ、更に三年後にはドイツへと忙しい社会人スタートしたのは関谷君だった。

福島スタート一年目、原料ラスカがなくなり、あわてて渡辺商工に電話し、10トン至急送れと頼んだが、オイルショック直後で物が極端になく2ヶ月後5トン集めてくれた。残りは海外に飛んで行って集めてくれたが、渡辺商工の常務さん、アフリカまでとんでくれたが急病でパリで死んでしまわれた。悲しい出会いもありました。

た。その中心にいたのが長谷川君であった。この一枚の写真はふくしまスタートして8年後、土湯峠でのいも煮会のもので、ふくしまで生まれた出向者2世達の元気な姿である。

福島の皆さん有難う

齋藤禎秀

此度は、福東OB会設立15周年を迎えられ、会員皆様、そして役員の皆様に心よりお祝い申し上げます。しかし、この間には、いろいろな出来事があり、楽しいこと、悲しいこと、そして苦しいことがあったことと思います。工場閉鎖、そしてあの忌まわしい東日本大震災による原発事故では



作品の前で

皆さんの生活が一変し、地元を離れなければならなくなつた皆様のご苦労には言葉では言い表せないご苦労があつたと思います。

それがいまだに続き地元に戻れない方がいらつしやることに心痛な思いをしています。それでも必ず平穏な日が来ますので、それまで頑張つて下さい。応援しています。福島東洋通信機が、保原で操業開始したのは、早いもので45年前のことになります。その後、小高工場も操業を始め、各工場ともいろいろなことがありましたが、順調に業績を上げることが出来ました。これは多くの福島の皆さんの努力のおかげで成しえたことで本当に感謝しております。操業当初に入社された皆さんは、還暦を過ぎ、第2の人生をスタートされた方も、いらつしやると思います。今は人生100年と言われていますので、何か目標を見つけ、その目標に向かって頑張ら過ぎずに、でも、あきらめずに体力の続く限り